

【開催概要】

研究例会「異域」をめぐる文学——異域から日本を考える——

二〇一五年一月三十一日（土） 午後一時～五時

於 立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館 三階多目的ホール

目黒 将史（日本学術振興会特別研究員）

佐野 愛子（明治大学大学院生・日本学術振興会特別研究員）

小此木敏明（立正大学非常勤講師）

丹羽みさと（立教大学兼任講師）

杉山 和也（青山学院大学大学院生） *コメンテーター

木村 淳也（明治大学兼任講師） *コメンテーター

鈴木 彰（立教大学文学部教授・日本学研究所所員） *司会・コーディネーター

【発表要旨】

蝦夷、琉球をめぐる異国合戦言説の展開と方法

目黒将史

近世中期以降多数の異国合戦軍記が生み出され享受されている。〈蝦夷軍記〉、〈薩琉軍記〉もまた近世期において多種多様に流布した作品である。〈蝦夷軍記〉は、寛文九年（一六六九）のシャクシャインの蜂起に呼応したアイヌが蝦夷地内の交易船や鷹待・金堀を襲撃した松前藩に対するアイヌの蜂起、いわゆるシャクシャインの戦いを描いた軍記群の

総称であり、〈薩琉軍記〉は、慶長十四年（一六〇九）の薩摩藩による琉球侵攻を、新納武蔵守と佐野帯刀との対立譚を軸に描く軍記の総称である。二つの軍記は描く地域は真逆だが、その享受の背景は極めて近似している。

江戸前期において、東アジア諸国を揺るがす一つの事件があった。明の滅亡と清王朝の誕生である。清は東アジアの支配領域の確定に乗り出し、江戸幕府もその流れに巻き込まれていく。その一翼を担ったのが新井白石であり、白石は江戸幕府による国家政策の一環として、日本国土の支配域の確定をめざしていく。白石の言説にある蝦夷を「北倭」、琉球を「南倭」とする論は異国合戦言説の展開に影響し、物語の中に組み込まれていく。〈蝦夷軍記〉が源義経の蝦夷渡海譚、〈薩琉軍記〉が源為朝の琉球渡海譚を取り入れることもその一端であり、異国である蝦夷や琉球の建国神話や神として崇拜される存在にヤマトの武士の物語を採用するのである。さらに幕末には欧米諸国や露西亜の東アジアへの進出もあり、そのため「異国に勝つ物語」の需要が高まり、異国合戦言説がさまざまなに享受されていく。徳川幕府の日本の領土確定施策などの国家政策が異国合戦軍記の享受、流布の背景にある様相について明らかにしていく。

『粵甸幽霊集録』における神——モンゴルの侵略を通して——

佐野愛子

『えいどんゆうれいしゅう 粵甸幽霊集録』は開祐元年（一三二九）に李濟川（リー・テー・スエン）がベトナムの地にいる神々を「歴代人君（八位）」、「歴代人臣（十二位）」、「浩氣英靈（十位）」にわけ、その三十位の神の事跡を記した書である。

話の末尾に陳(チャン)朝(一二二五―一四〇〇)が重興元年(一二八五)、同四年(一二八八)、興隆二十一(一二三三)年にそれぞれ与えた神号を記録しているのが特徴といえる。『粵甸幽靈集録』は武瓊の編んだ伝説集である『嶺南撫怪列傳』とともにきわめて有名な書であるが、編者の李濟川は正史にその名が見えず、その編纂理由は序を除いては明らかではない。

本発表では『粵甸幽靈集録』の内容から、その編纂理由に迫りたい。具体的には『粵甸幽靈集録』にはどのような神が記されているのかを明らかにしてゆく。そしてまた本書の特徴である年号の意味を考察することとで、本書の成立が元豊七年(一二五七)、重興元年および同四年の三度にわたってベトナムを襲ったモンゴルの侵略を抜きにしては語れないものであることを述べてゆく。日本においても大きな衝撃を与えたモンゴルの侵略であるが、本発表ではそれがベトナムにおいてどのような作用をもたらしたのかを『粵甸幽靈集録』を通して見てゆきたい。

日持上人の異域布教説とその展開——義経入夷説との比較を通して——

小此木敏明

日持は、日蓮の本弟子六人のうちの一人であるが、日蓮の七年忌にあたる正応元年(一二八八)以降の消息がはつきりしない。それが中世末期になると、蝦夷へと布教に赴いたことになる。さらに近世期には、朝鮮や中国に渡海したとされ、日持の伝記類には布教の痕跡が示されるようになった。日持の異域布教説が流布する過程には、一部源義経の入夷説や大陸渡航説の影響があったと思われる。よって義経入夷説などの広がりとは対比し、日持の異域布教説の展開を検証する。近代帝国

主義下の日本において、日持は海外布教の第一人者とされ、その足跡は一部史実として認識された。まず近代における日持の知名度を確認するため、日持の劇化の例、および小谷部全一郎の『成吉思汗は源義経也』(一九二四)などが引く日持の例を紹介する。小谷部は義経の大陸渡航の事実を補強する一例として、日持の例を持ち出している。

次に近世期の例を紹介する。中でも版本として世に出た、日蓮の『鷹峰群譚』(二七三三刊)と日潮の『本化別頭仏祖統紀』(二七三〇成立、一七九七刊)の叙述を検討する。これらの資料は、今までの日持研究でも取り上げられているが、日持伝以外に着目すれば、どちらも義経関連の記事を有していることが分かる。『鷹峰群譚』は、松前に住んでいた弟子から聞いたという義経の話を、『本化別頭仏祖統紀』は、義経が金国へ渡ったことを述べている偽書『金史別本』(巻第三十六「通別一覽志上」)を引いている。両書が成立した享保期(一七二六―一七三六)は、義経入夷説が全国的に広がる時期でもあり、日達・日潮共に義経に関心を持っていたことが分かる。しかし、日持の渡海を「鎮西」からとする『鷹峰群譚』は、日持を義経の入夷説と結びつけてはいない。一方、『本化別頭仏祖統紀』の中には、義経が初めて松前を開き、その後に日持が続いたと述べている箇所がある。『本化別頭仏祖統紀』は、日持の異域布教を義経と関連づけて捉えていたと思われる。

福地桜痴の交友と業績

丹羽みさと

福地桜痴（源一郎）は、安政五年に江戸に上り、御雇通詞として登用される。その後、四度の洋行を経て、教育者、新聞記者、劇作家、政治家など様々な職に携わった。この一貫性の無さから、「器用貧乏」という評価が大勢を占めている。しかし果たして彼の活動は、その時々興味に任せた断片的なものだったのだろうか。

本発表では、特に文学に関する桜痴の意識に注目して、その活動の根幹に迫りたい。

従来、桜痴の「文学観」は、洋学者としての自負に基づき、世間一般への啓蒙媒体として、難解な漢文体を用いない〈俗文学〉に、その有益性を求めたとされる。しかし、職業意識以外にも、桜痴の「文学観」を規定する要素があったのではないだろうか。

長崎にいた少年時代、桜痴が父苟庵から受けた教育は、「有用な人」となるために、節用集など有用である書物のみを読むべきである、戯作等は無用の書であるというものであった。桜痴の文学論は約十五年の年月を経て記された『東京日日新聞』の社説に記されるが、ここでまず展開されたのが、戯作等が「達意」の最も有用な文学であるという論であった。その根拠として提示されたのが、幕末から明治にかけて数度〈異域〉に赴いた経験や、〈異域〉の文学から得た知識に基づき、洋書・洋文と同等の（世間一般に対する）わかりやすさ、読みやすさを戯作が保っているという見解であった。これは苟庵の説論を否定するものではなく、戯作も苟庵の主張に組み込むことが出来るという正当性の発見と考えられる。

また、文学論を扱った初期の社説には、戯作者の代表として、仮名垣魯文や山々亭有人の名前が挙げられている。桜痴は幕末から彼らと親交を深めており、その経験が苟庵の戯作無用論に疑問を抱くきっかけになったことは、充分考えられる。

少年期からの説論と〈異域〉経験、交友関係などの複層的な状況から、戯作の「有用さ」を発見した桜痴は、その後、戯曲や翻案、小説等の〈俗文学〉に携わっていく。桜痴の文学観をふまえると、これは断片的な興味に基づく突発的な転身ではなく、己の理論の実践であったのではないだろうか。